

国語

現代の国語，言語文化

〈近代以降の文章〉

1. 開始の指示があるまで，この問題冊子を開かないでください。
2. 机上には，受験票，黒鉛筆，消しゴム，時計以外のものを置かないでください。
3. 受験票と机の上に貼ってある受験番号が同じかどうか確認し，問題冊子と解答用紙のすべてに受験番号と氏名を記入してください。
4. 解答は，すべて解答用紙に記入してください。
5. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は，手を高く挙げて監督者に知らせてください。
6. 不正行為について
 - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
 - ② 不正行為に見えるような行動が見受けられた場合は，監督者が注意をします。
 - ③ 不正行為を行った場合は，直ちに受験を取りやめさせます。
7. 試験終了後，この問題冊子を持ち帰ってください。

受 験 番 号	氏 名

問題は **一** から **三** までで、一ページから十五ページまであります。確かめなさい。

解答は解答番号 **1** から **24** までにマークしなさい。

一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電灯の

ひとつの青い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

風景やみんなといつしよに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにとりつづける

因果交流電灯のひとつの青い照明です

(ひかりはたもち、その電灯は失はれ)

これは宮沢賢治の詩、「春と修羅 序」の冒頭部分である。この詩はどこか幻想的で非現実的であるように見えるかもしれない。確かに、「わたくし」というものを確固たる主体として前提し、その上で個々人のつながりを考える見方、いわゆる個人主義の立場からすれば、「わたくしといふ現象」という表現そのものがあまりにも弱々しい。しかもその「わたくし」が「仮定された有機交流電灯のひとつの青い照明」であり、「あらゆる透明な

幽霊の複合体」であるというのは、幻想的ではあっても合理的に理解するものには見えない。

そうであっても、この詩が描き出すイメージが美しく、心にせまるものであることには、多くの読者の同意するところであろう。美しいもの、心にせまるものには真実がある。これは科学者が真理を探究する際に、最もたよりにする信念である。

たとえば輝く太陽を中心として惑星が楕円を描いて巡る姿は、地球を中心にして太陽や惑星が振れながら行ったり来たりする姿より荘厳である。さまざまな種類の生命が、何者かの手によって時とみなしに創造されるという生命史像よりも、ひとつの生命から分かれ出て、それぞれに生き抜きながら、互いに相互作用しつつそれぞれに変化し、新しい種を生み出し、また滅び、次々と新しい生態系を生み出していく姿の方が豊潤である。あるいはまた、そのように形成された豊かな生態系が、宇宙から飛来した小惑星の地球への激突によって瞬時に破壊されてしまうという描像は悲劇的に美しい。この美しさへの信念に従いつつ、さまざまなゆるぎない形で立証していくのが科学の方法である。そこでこの詩の美しさをたよりに思索をすすめていくことにしよう。

宮沢賢治の詩の美しさのどこに真実を求めればよいのか。その第一歩として、「わたくし」という魂の運動と深く関係する身体器官たる「脳」の活動をイメージするところから始めよう。

脳は膨大な数の神経細胞とそれを助ける種々の細胞の塊である。赤ちゃんの脳には一〇〇〇億個を超える神経細胞があり、年齢を経るに従って減少する。その神経細胞は、ただ集まっているのではなく、それぞれの細胞

が一〇〇〇本から一〇万本程度の「手」を伸ばし、他の神経細胞と連結している。a、近くの神経細胞とは連結しやすいが、遙か遠くの神経細胞と長い手を伸ばしてつながっている場合も多い。

神経細胞は基本的に「発火している／していない」の二状態しか持たないデジタルな素子である。ある瞬間に発火すると、それからしばらくは発火できず、回復までに時間がかかる。神経細胞の状態変化を発火しうる能力という観点で見ると、発火した瞬間に発火能力は最低になり、そこから徐々に回復して発火可能状態に復帰する、という描像になろう。

それぞれの神経細胞にはそれぞれの発火の周期のようなものがある。ひとつひとつを切り離して観察するならば、ある細胞は頻繁に発火するし、別の細胞は時々発火する。

とはいえ、このような固有の発火頻度が生きた脳のなかで実現されることはない。b 脳を構成する神経細胞は相互に強く影響しあっているからである。ある細胞の発火は別の細胞の発火を促進し、あるいは抑制する。ある細胞が発火すると、別の細胞が発火しやすくなるような接続の仕方が「促進」の関係であり、逆に発火しにくくなるのが「抑制」の関係である。

c それぞれ神経細胞は、それぞれに固有の発火頻度を持つものの、相互に接続しているたくさんの細胞の発火状態から促進または抑制の影響を受けながら発火という運動を続けており、その発火状態がまた他の細胞の発火状態に促進または抑制の効果を与える。このような複雑なネットワークの上で個々の神経細胞の発火がある。

ここで神経細胞を小さな発光ダイオードのようなものと思えば、その電位

の高さを明るさで表現してみよう。電位が低いときには暗く、電位が高いときには明るい。d それぞれの神経細胞の持っている固有の特性

を色で表現してみよう。ある種類の発火の仕方をする細胞は赤色発光ダイオードで、別の種類は青色発光ダイオードで表現する、という具合である。数百億という発光ダイオードが複雑に結びついて巨大なネットワークを形成しており、そこでは色とりどりの光が、互いに影響しあいながら瞬き続ける。あるときにはそこに大きな波のようなものが形成され、あるときにはいくつもの渦巻きが生まれ、あるときにはそれぞれの発光ダイオードが思い思いに明滅する。このようなものを少し離れて眺めれば、きっと夢のように美しいであろう。

このように仮定された有機交流電灯のダイナミクスは、^{注1} 透明な幽霊の複合体のようであり、たとえば青色発光ダイオードで表現される神経細胞は、風景やみんなといったしよに、「せはしくせはしく明滅しながら いかにも たしかにとりつづける 因果交流電灯のひとつの青い照明」にほかならない。

このような有機交流電灯の明滅の全体が生み出す美しい映像の要素は、個々の発光ダイオードの状態ではなく、ある発光ダイオードの発火状態と別の発光ダイオードの発火状態のちがいとその関係のありかたとである。テレビの画面の上に映し出される人の顔を考えてみればよい。その画面を大きく拡大すると、さまざまな色の点がびっしり並んでいるだけである。その一点一点が顔の要素なのではない。ある色の点と別の色の点のちがいが生み出す関係のありかたの総体が顔のイメージを創り出す。

このような神経細胞のダイナミクスの全体に心というシステムが立ち現

れる。神経細胞はこのシステムの構成要素ではない。神経細胞同士の間^イに展開される相互作用に従った動きを要素として心は構成される。個々のやり取りが複雑に作用しあうなかで、自律的に立ち上がる「混沌^{とん}とした」秩序が心である。

心が神経細胞を要素とするという解釈は決して成り立ち得ない。なぜなら大人の人間の脳について言うなら、何万もの神経細胞が毎日死んでいるからである。心という計算過程が、個々の神経細胞とその相互接続そのものに依拠しているとするならば、それはたちまち破綻してしまうであろう。複雑に相互接続する膨大な数の神経細胞で構成される脳は、心が再生産するための場ではあっても、心そのものではありえない。

心は、それが神経細胞の間のやり取りのみを構成要素とするという意味で閉じている。ある神経細胞の動きは別の神経細胞の動きに作用し、それが次から次へと受け渡されていく。それ以外の出来事は心の構成要素とな^ウりえない。

しかし心は情報を通じて外界に対して開かれている。さまざまな感覚器官を通じて、外部の事態が神経細胞の動きへと変換された上で別の細胞へと受け渡される。こうして投げ込まれた動きは、いくつもの複雑なサイクルを通じて処理され、やがて筋肉の動きへと変換されて外部に投げ返される。

それ自体がきわめて複雑な動くネットワークとして構成される心というシステムは、情報を受け渡すサイクルの一部を構成することで外部と接続する。たとえばこの文章を書いている私の目はコンピュータの画面からの光の構成するちがいを感知し、それを視神経系の動きへと変換する。

この動きは中枢神経系に伝えられ、そこで展開されているさまざまな受け渡しのサイクルと合流する。その動きが手の筋肉へと伝えられ、指の動きへと変換される。この動きがキーボードの動きを作りだし、それが処理されて、再度画面へと映し出される。情報はこのようなサイクルのなかで生成する。

このように神経細胞の織りなす発火の動的な構造として心はあり、常に外に開かれたサイクルの一部を構成しつつ再生産されている。個々の神経細胞の発火はこのような有機交流電灯のひとつの照明であるが、その全体としての心もまた外に開かれている。

ある心システムの外には別の心システムがある。もちろん、二つの心システムが直接に相互作用することはない。確かに、ある人が別の人とやりとりをするなかで、「思いが通じた」と思うことは可能である。それでも、「思いが通じた」という思いはその人の思いなのであって、相手が感じている思いそのものを感じることはない。もし二つの心システムがじかに接触しうるとしたら、相手の感じている思い、痛み、想像、後悔、喜び、悩み、欲望……などをじかに感じてしまうことになる。そのようなことが起^エれば、もはやひとつの人格として自分を維持することは不可能となる。

しかし、だからといって、二つの心システムがなんらの相互作用もせず^エに閉ざされているわけでもない。二つの心システムは、二つのパチンコ玉が衝突するのは違い、もっと豊かな形で相互作用しうる。なぜなら、ある心システムが外に開かれたサイクルの一部を形成しているように、別の心システムも外に開かれた別のサイクルを形成しているからである。

さらには、この二つのサイクルが相互作用するなかで接続したとき、双

方を組み込む形で新しいサイクルが形成されることも十分に可能である。もちろん、そのようなサイクルの形成が保証されているわけではない。それでも、その可能性は常に開かれている。

このような新しいサイクルの形成に際しては、心システムを構成する神経細胞の発火のダイナミカルなネットワークが自律的に形成されるのと同じ原理が作動しているはずである。つまり、心システムが可能であるなら、心システム同士の相互作用もまた原理的に可能である。

もし、二つの心システムを含むようなサイクルがメタレベルで形成されたなら、そこにあるひとつの心を、その心の内部から見たならばそれは「わたくし」であり、もうひとつの心が「あなた」である。

「わたくし」と「あなた」を構成するサイクルが、別の「わたくし」と「あなた」を構成するサイクルと相互作用し、それがさらに複雑に連なって大きなネットワークを形成したとき、そこに社会が創発する。

神経細胞の集団と心との関係と同じものが、人間の集団と社会との間にも見いだすことができる。神経細胞の集団が心を構成しないのと同じように、人間の集団は社会を構成しない。社会を構成するのは人間の行為である。

人間の行為が、心の要素を生み出す神経細胞の発火に相当する。ある神経細胞の発火が促進や抑制という形で他の神経細胞の発火に変換されたように、ある人間の行為は他の人間の行為に変換される。ある行為の産出が別の行為の産出を促進あるいは抑制し、その行為がまた別の行為に波及し、という形で展開する行為の波及のダイナミクスは、神経細胞の複雑な発火の受け渡しによって形成されるダイナミクスと同じ性質を持っている。

神経細胞の発火ダイナミクスの全体として心というシステムが生成したのと同じように、人々の行為のダイナミクスの全体として社会が創発する。社会の要素は人間ではなく、その産出する行為である、というのはこのような意味である。

行為が次々と連鎖して、その連鎖の全体が消滅することなく維持される限り社会はある。もしその連鎖が途切れてしまえば、いかに人間の集団が存在しようとも、社会は消えてなくなる。瞬間瞬間に生滅する光と光の間の関係が大きなうねりを創り出すように、人と人との間に瞬間瞬間に生滅する行為が社会という変動する構造を創り出す。歴史とはこのような全体の変遷のことである。

このような行為の連鎖としての社会をイメージしたとき、そこに現れる「わたくし」は、すべてを自分で引き受け意思決定する主体ではない。「わたくし」という現象は、常に外部に開かれて形成された心システムが、他者の行為を入力とし、他者への行為を出力し、社会システムの要素を産出する結節点に立ち現れる。

このようにして立ち現れる「わたくしといふ現象」を、そのまま素直に表現したものが、冒頭の宮沢賢治の詩にほかならない。宮沢賢治の詩の美しさは、このような複雑なダイナミクスの持つ美しさそのものである。

(安富歩『複雑さを生きる』による)

注1 ダイナミクス——ここでは、相互作用のことを言う

注2 メタレベル——ここでは、ある概念・対象の、もう一段高いレベルのことを言う

1

傍線部ア「この詩はどこか幻想的で非現実的であるように見えるかもしれない」において、筆者は「見える」ではなく、「見えるかもしれない」と表現している。そのように表現した理由を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① この詩は幻想的、非現実的であるように見えることにとどまらず、他の指摘すべき観点があると考えするため。

② この詩には美しさがあることから、表現の対象としてではなく、科学の対象となると考えるため。

③ 真理は幻想的や非現実的というイメージの世界とは別のところにあるが、そうしたイメージを否定することに自信がないため。

④ この詩は多くの読者にとって幻想的、非現実的と感じられるが、筆者にとってはとても力強く現実的であると感じられるため。

⑤ 筆者は個人主義の立場ではなく科学者であることから、多くの読者とは同じではないと考えるため。

2

空欄

a

d

なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① a ところが b それというもの

c つまり d また

② a もちろん b それというもの

c また d ここで

3

傍線部イ「神経細胞はこのシステムの構成要素ではない」とあるが、その理由を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

③ a ところが b つまり

c というのは d ここで

④ a ただし b つまり

c なぜなら d また

⑤ a もちろん b なぜなら

c つまり d また

① 心の神経細胞は外部の事態を感覚器官を通じて変換するため。

② 神経細胞自体ではなく、神経細胞の動きが心の構成要素であるため。

③ 心自体は複雑な動くネットワークを構成要素とするため。

④ 心は神経細胞が自律的に立ち上がる秩序であるため。

⑤ 大人の脳では何万もの神経細胞が毎日死んでいるため。

4

傍線部ウ「心は情報を通じて外界に対して開かれている」とあるが、その内容を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 心は神経細胞のやり取りを構成要素としているので閉じているが、外部の事態はさまざまな感覚器官を通じて神経細胞の動きへと変換されて情報が生成されることで心は外部に開かれているということ。
- ② 心は神経細胞の間のやり取りを構成要素としていて閉じているが、情報を受け渡すサイクルの一部を構成することで、外部と接続するということ。

- ③ さまざまな感覚器官は外部にある情報を感知することができる上に、さまざまな受け渡しのサイクルが構成されていることから、心は外に開かれたシステムであるということ。

- ④ 情報は複雑な動くネットワークのなかで生成されるのであり、心というシステムが、その情報の生成と受け渡しのサイクルを構成していることから、開かれたシステムであるということ。

- ⑤ 神経細胞は動的な構造を持ち、そのネットワークを構成する心というシステムにおいて生成される情報のやり取りがなされることで外部と接続しているということ。

5

傍線部エ「もはやひとつの人格として自分を維持することは不可能となる」とあるが、その理由を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 相手が感じている思いそのものを感じることができないから。
- ② 二つの心システムがじかに接触することができないから。
- ③ 一人の人間の中に、二つの別の心システムがあることになるから。
- ④ 二つの心システムは相互作用せずに閉ざされているわけではないから。

- ⑤ 二つの心システムは互いに外に開かれたサイクルを形成しているから。

6

傍線部オ「人間の集団は社会を構成しない」とあるが、その理由を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 人間の集団は、ただ社会の要素なのではなく、複雑に連なることで社会を創発するから。
- ② 社会はただ人間が集まるだけでは創られず、人間が社会で産出しようとする行為のダイナミクスによって創られるから。
- ③ 社会は人間がただ集まるだけではなく、ダイナミクスであり、かつ互いに波及しあう性質である行為によって創られるから。
- ④ 社会は行為が次々と連鎖し、その連鎖が維持されることで成立するのであって、人間の集団が存在するだけでは成立しないから。
- ⑤ 人間がただ集まるだけではなく、行為をし、その行為の連鎖が途切れることで社会の維持が不可能になるから。

7

傍線部カ「宮沢賢治の詩の美しさは、このような複雑なダイナミクスの持つ美しさそのものである」とあるが、その内容を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 宮沢賢治の詩は、神経細胞のダイナミクスの全体として心システムが生成すること、また人々の行為のダイナミクスの全体として社会が創発するということの持つ美しさを表現している。
- ② 「わたくし」は、外部に開かれて形成された心システムを持ち、その「わたくし」がいることで社会システムは生み出されるということの美しさを宮沢賢治の詩は描いている。
- ③ 宮沢賢治の詩にある美しさは、その表現自体にはなく、「わたくし」は常に外部に開かれて形成された心システムを持ち、そのことによって社会システムが産出されるという真理を表現している。
- ④ 「わたくし」と「あなた」を構成するサイクルが、別の「わたくし」と「あなた」を構成するサイクルと相互作用し、それがさらに複雑に連なつて大きなネットワークを形成する、その結節点に現れる「わたくし」を宮沢賢治の詩は描いている。
- ⑤ 宮沢賢治の詩にある「わたくしといふ現象」は、あまりに弱々しく感じられそうであるが、実は「わたくし」は意思決定する主体であるとする、心システム、社会システムについて明らかにすることはできなく、「わたくしといふ現象」というダイナミクスとして捉えることで真理を描いている。

二

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

語り手「余」の妻が患っている「肺病」とは結核であり、作品内の時代では決定的な治療法がなく、感染率と死亡率が高い「不治の病」として恐れられていたことに留意して読み進めること。

もう何年前になるか思い出せぬが日は覚えている。暮れもおし詰まった二十六日の晩、妻は下女を連れて下谷摩利支天の縁日へ出掛けた。十時過ぎに帰って来て、袂からおみやげの金鏢と焼栗を出して余のノートを讀んでいる机のすみへそつとせて、便所へはいったがやがて出て来て蒼い顔をして机の側へ坐ると同時に急に咳をして血を吐いた。驚いたのは当人ばかりではない、その時余の顔に全く血の気がなくなったのを見て、いっそう気を落としたとこれはあとで話した。

翌る日下女が薬取りから帰ると急に暇をくれといひ出した。この辺は物騒で、お使いに出るときつといやな悪戯をされますので、どうも恐ろしくて不気味で勤まりませぬと妙な事をいう。しかし見る通りの病人をかかえて今急におまえに帰られては途方にくれる。せめて代りの人のあるまで辛抱してくれと、よしやまだ一介の書生にしろ、とにかく一家の主人が泣かぬばかりに頼んだので、その日はどうやら思い止まったらしかったが、翌日は国許の親が大病とかいう訳でとうとう帰ってしまう。掛取りすることに来た車屋の婆さんに頼んで、なんでもよいからと桂庵から連れて来てもらったのが美代という女であった。仕合せとこれが氣立てのやさしい正

直もので、尤も少しぼんやりしていて、狸は人に化けるものだというような事を信じていたが、とにかく忠実に病人の看護もし、叱られても腹も立てず、そして時にしくじりもやった。手水鉢を座敷の真中で取落として洪水を起こしたり、火燵のお下りを入れて寝て蒲団から畳まで径一尺ほどの焼穴をこしらえた事もあった。それにもかかわらず余は今に到るまでこの美代に対する感謝の念は薄らぐぬ。

病人の容体は善いとも悪いともつかぬうちに年は容捨なく暮れてしまう。新年を迎える用意もしなければならぬが、何を買ってどうするものやらわからぬ。それでも美代が病人の指図を聞いてそれに自分の意見を交ぜて一日忙しそくに働いていた。大晦日の夜の十二時過ぎ、障子のあんまりひどく破れているのに気がついて、外套の頭巾をひっかぶり、皿一枚をさげて森川町へ五厘の糊を買いに行ったりした。美代はこの夜三時過ぎまで結び菟蓐をこしらえていた。

世間は目出度いお正月になって、暖かい天氣が続く。病人も少しずつよくなる。風のない日は縁側の日向へ出て来て、紙の折鶴をいくつとなくこしらえてみたり、秘蔵の人形の着物を縫うてやったり、曇った寒い日は床の中で「黒髪」を弾くくらいになった。そして時々心細い愚痴っぽい事を言つては余と美代を困らせる。妻はその頃もう身重になっていたので、この五月には初産という女の大難をひかえている。おまけに十九の大厄だと言ふ。美代が宿入りの夜など、木枯しの音にまじる隣室の淋しい寢息を聞きながら机の前に坐つて、ランプを見つめたまま、長い息をすることもあった。妻は医者の方に合ひの氣休めをすっかり信じて、全く一時的な氣管の出血であつたと思つていたらしい。そうでないと信じたくなかつたの

であろう。それでもどこにか不安な念が潜^{ひそ}んでいると見えて、時々「ほんとうの肺病だつて、なおらないと極^{きま}つた事はないのでしょね」とこんな事をきいた事もある。またある時は「あなた、かくしているでしよう、きつとそうだ、あなたそうでしよ」とうるさく聞きながら、余の顔色を読もうとする、その折るような氣遣^{きづか}わしげな目づかいを見るのが苦しいから「馬鹿な、そんな事はないと言つたらない」と邪慳^{やけん}な返事で打消^{うちけ}してやる。それでも一時は満足する事が出来たようであつた。

病氣は少しづつよい。二月の初めには風呂にも入る、髪も結うようになった。車屋の婆さんなどは「もうスツカリ御全快だそうで」と、独りできめてしまつて、そつと懷^{ふとこ}から勘定書を出して「どうも大変に、お早く御全快で」と言う。医者^{いしや}の所へ行つて聞くと、善いとも悪いとも言わず、「なにしろちやうど御妊娠中ですからね、この五月がよほど御大事ですよ」と心細い事を言う。

それにもかかわらず少しづつよい。月の十何日、風のない暖かい日、医者^{いしや}の許可を得たから植物園^注へ連れて行つてやると言うとお変に喜んだ。出掛^{でかけ}となつて庭へ下りると、髪があんまりひどいからちよつと撫^なで付けるまで待つて頂戴^{ちやうたい}という。懷^{ふとこ}手^てをして縁^{ふち}へ腰掛けて淋しい小庭を見廻^{みまわ}す。去年の枯菊が引かれたままで、あわれに朽ちている、それに千代紙の切れか何かが引掛つて風のないのに、寒そうに顫^{ふる}えている。手水鉢の向いの梅の枝に二輪ばかり満開したのがある。近付いてよく見ると作り花がくつつけてあつた。おおかた病人のいたずらしい。茶の間の障子のガラス越しに覗^{のぞ}いてみると、妻は鏡台の前へ坐つて解かした髪を握つてぱらりと下げ、櫛^{くし}をつかつている。ちよつと撫でつけるのかと思つたら自分で新たに巻き

直すと見える。よせばよいのに、早くしないかと急^せき立てておいて、座敷のほうへ戻つて、横になつて今朝見た新聞をのぞく。早くしないかと大声で促す。そんなに急き立てると、なお出来やしないわという。黙つて台所の横をまわつて門へ出てみた。往來の人がじろじろ見て通るから仕方なしに歩き出す。半町ばかりぶらぶら歩いて振り返つてもまだ出て来ぬから、また引返してもと来た通り台所の横から縁側へまわつて覗いて見ると、妻が年甲斐^{としがい}もなく泣き伏しているのを美代がなだめている。あんまりだと言う。一人どこへでもいらつしやいという。まあともかくもと美代がすかしなだめて、やつと出掛ける事になる。実に好^よい天氣だ。「人間の心が蒸発して霞^{かすみ}になりそうな日だね」といつたら、一間^{いっけん}ばかり後を雪駄^{せつた}を引きずりながら、大儀^{たいぎ}そうについて來た妻は、エエと氣のない返事をして無理に笑顔をこしらえる。この時始めて氣が付いたが、なるほど腹の帶の所が人並みよりだいぶ大きい。あるき方がよほど変だ。それでも当人は平氣でくつついて来る。美代と二人でよこせばよかったと思ひながら、無言で歩調を早める。植物園の門をはいつて真直^{まぢ}ぐに広いたらたら坂を上つて左に折れる。穩^エやかな日光が広い園に一杯になつて、花も緑もない地盤はさながら眠つたようである。温室の白塗りがキラキラするようでその前に二、三人懷手をして窓から中を覗く人影が見えるばかり、噴水も出ていぬ。睡^{すい}蓮^{れん}もまだつめた泥の底に真夏の雲の影を待っている。温室の中からガタと下駄^{げた}の音を立てて、田舎^{いなか}の婆さんたちが四、五人、狐^{きつね}につままれのような顔をして出て来る。

余らはこれと入れちがつてはいる。活力^みの充ちた、しめつぱい熱帶の空氣が鼻^{あな}の孔から腦を襲う。椰子^{やし}の木や琉球^{りゅうきゅう}の芭蕉^{ばしやう}などが、今少し延び

たら、この屋根をどうするつもりだろうといつも思うのであるが、今日もそう思う。爪哇ジャワという国には肺病が皆無だと誰れかのいった事を思い出す。妻は濃緑に朱の斑点はてんの入った草の葉をいじっているから「オイよせ、毒かも知れない」といったら、慌あわてて放して、いやな顔をして指先を見つめてちよつと嗅かいでみる。左右の廻廊かいろうにはところどころ赤い花が咲いて、その中からのんきそうな人の顔もあちこちに見える。妻はなんだか気分が悪くなったという。顔色はたいして悪くもない。急に生温かい処ところへはいったためだろう。早く外へ出たほうがよい、おれはもう少し見て行くからといったら、ちよつとためらったが、おとなしく出て行つた。紅あかい花だけ見てすぐ出るつもりでいたら、人と人との間へはさまつて、ちよつと出損つて、やつと出てみると妻はそこにはいぬ。どこへ行つたかと思廻はまわすと、遙か向うの東屋あずまやのベンチへ力なさをうに凭もたれたまま、こつちを見て笑つていた。園の静けさは前に変わらぬ。

A

。気分はすっかりよくなったといふから、もうそろそろ帰ろうかと言うと、少し驚いたように余の顔を見つめていたが、せつかく来たから、もう少し、池の方へでも行つてみましようという。それもそうだとそつちへ向く。

崖をおりかかると下から大学生が二、三人、黄色い声でアリストートルがどうしたとかいうような事を議論しながら上つて来る。池の小島の東屋に、三十ぐらいの眼鏡めがねをかけた品の好い細君が、海軍服の男の児こと小さい女の児を遊ばせている。海軍服は小石を拾つては氷の上をすべらせて快い音を立てている。ベンチの上には皺しわくちやの半紙が拡げられて、その上にカステラの大きな片きれがのつている。カ「あんな女の児が欲しいわねえ」と妻がいつにない事をいう。

出口の方へと崖の下をあるく。何の見るものもない。後ろで妻が「おや、団栗どんぐりが」と不意に大きな声をして、道脇の落葉の中へはいって行く。なるほど、落ち葉に交じつて無数の団栗が、凍いてた崖下がけしたの土にころがっている。妻はそこへしゃがんで熱心に拾いはじめる。見る間に左の掌てのひらに一杯になる。余も一つ二つ拾つて向うの便所の屋根へ投げると、カラカラと転がって向側へ落ちる。妻は帯の間からハンケチを取出して膝の上へ拡ひろげ、熱心に拾い集める。「もう大概にしないか、馬鹿だな」といつてみたが、なかなかやめそうもないから便所へ入る。出てみるとまだ拾っている。「一体そんなに拾つて、どうしようというのだ」と聞くと、面白そうに笑いながら「だつて拾うのが面白いじゃありませんか」という。ハンケチに一杯拾つて包んで大事そうに縛むすっているから、もうよすかと思うと、今度は「あなたのハンケチも貸して頂戴」という。とうとう余のハンケチにも何合なんごうかの団栗を充たして「もうよしてよ、帰りましょう」とどこまでもいい気な事をいう。

団栗を拾つて喜んだ妻も今はない。お墓の土には苔こけの花が何遍か咲いた。山には団栗も落ちれば、鴨ひよどりの鳴く音に落ち葉が降る。今年の二月、あけて六つになる忘れ形身のみつ坊をつれて、この植物園へ遊びに来て、昔ながらの団栗を拾わせた。こんな些細ささいな事にまで、遺伝というようなものがあるものだから、みつ坊は非常に面白がつた。五つ六つ拾うごとに、息はずませて余の側へ飛んで来て、余の帽子の中へひろげたハンケチへ投げ込む。だんだん得物えものの増して行くのをのぞき込んで、頬ほを赤くして嬉うれしそうに溶けそうな顔をする。争われぬ母の面影がこの無邪気な顔のどこかの隅からチラリとのぞいて、うすれかかった昔の記憶を呼び返す。「おとうさん、大きな団栗、こいもこいもこいもこいもみんな大きな団栗」と

小さい泥だらけの指先で帽子の中に累々とした団栗の頭を一つ一つ突つつく。「大きい団栗、ちいちゃい団栗、みいんな利口な団栗ちゃん」と出たための唱歌のようなものを歌って飛び飛びしながらまた拾い始める。余はその罪のない横顔をじつと見入って、亡妻のあらゆる短所と長所、B、なんにも遺伝して差支^{さしつか}えはないが、始めと終りの悲惨であった母の運命だけは、この子に繰返させたくないものだと、しみじみそう思ったのである。

(寺田寅彦「団栗」による)

注1 下谷摩利支天——東京都下谷区(現・台東区)上野にある徳大寺のこと

注2 金鰐——和菓子の一種

注3 書生——ここでは「学生」の古い呼び方

注4 掛取り——ツケ(後払いの代金)を、年末近くにまとめて回収に
来ること

注5 桂庵——職業^{あつせん}斡旋所

注6 火燵のお下り——暖房のために使用していた木炭の残り火

注7 「黒髪」——琴の曲名

注8 宿入り——住み込みの奉公人が実家に帰ることを許される日。
「やぶ入り」ともいう

注9 植物園——「東京大学大学院理学系研究科附属植物園」(東京都文京区白山)、通称「小石川植物園」のこと

注10 アリストートル——古代ギリシアの哲学者・アリストテレスのこと

注11 こいも——「これも」の幼児語

※本文中には、現代では使用されていない表現が用いられているが、原文を尊重し、原文通りの記載とした。

8 傍線部ア「この美代に対する感謝の念は薄らがぬ」とあるが、それはな

ぜか。その理由を説明したものとして最も適切なものを、次の①

⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 氣立てがやさしく正直な美代が、車屋の婆さんにツケも払えないほど貧窮していた余夫婦を助け、家計を立て直してくれたことに感謝しているため。

② 氣立てがやさしく忠実な美代が、余夫婦の理不尽な叱責や愚痴にも耐え、一人前の女中になってくれたことに感謝しているため。

③ 氣立てがやさしく正直な美代が、結核の感染を恐れず、嘘の口実で仕事を辞めることもなく、余の妻を献身的に看病してくれたことに感謝しているため。

④ 氣立てはやさしいがドジなところもある美代が、色々の失敗をすることで余の家庭に笑いをもたらし、病身の妻の気晴らしになってくれたことに感謝しているため。

⑤ 氣立てがやさしく社交的な美代が、結核の感染を恐れて妻との会話を避けている余に代わり、妻の話し相手になってくれたことに感謝しているため。

9 傍線部イ「長い息をすることもあった」とあるが、誰の、どのような状態を表しているのか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 妻は、余が寝ている間も、腹式呼吸をしてひそかに出産に備えている。

② 余は、妻が寝ている間だけは、深呼吸をしてリラックスすることができる。

③ 美代は、実家に帰っても孤独を感じるばかりで、夜中に一人ため息をついている。

④ 妻は、余が寝ている間も安眠できず、自身の将来を心配して、ため息をついている。

⑤ 余は、妻が寝ている間も安眠できず、妻の将来を心配して、ため息をついている。

10 傍線部ウ「邪慳な返事で打消してやる」とあるが、「余」の態度を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 「一時的な気管の出血」を大げさにとらえて不安がっている妻と問答を続けることが馬鹿馬鹿しくなり、冷たい言葉で妻を突き放している。

② 自分が結核患者であることを信じたくない妻の「祈るような」気持ちをくみ取り、疑いをそっけなく一蹴することで、妻を励ましている。

③ 妻が「時々心細い愚痴っぽい事を言っては余と美代を困らせる」とにいら立ち、妻の言葉を乱暴に打ち消している。

④ 自分が結核になったのではないかと疑っている妻の「気遣わしげな目づかい」から早く逃れたくて、その場しのぎの嘘でごまかしている。

⑤ 「余の顔色を読もうとする」妻の態度が生意気に思えて気にさわり、とげとげしい態度で妻の言葉を否定している。

11 傍線部エ「穏やかな日光が広い園に一杯になって、花も緑もない地盤はさながら眠ったようである」とあるが、その後の空欄 A にも同じ様子を表現した一文が入る。最も適切な一文を、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 日光の目に見えぬ力で地上のすべての活動が解放され生命の鼓動が余の耳を打つように思われる

② 日光の穏やかな力で園内のすべてが凍てつく氷の中に眠りの時を迎えているように見える

③ 日光の目に見えぬ力で地上のすべての活動をそっと抑え付けてあるように見える

④ 日光の穏やかな力で園内の団栗のすべてが忙しない音を立てて落ちていくのが見える

⑤ 日光の目に見えぬ力で地上のすべての生命を焼き尽くさねば気が済まぬように見える

12

傍線部オ「少し驚いたように余の顔を見つめていた」とあるが、それはなぜか。この時の妻の心情を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 「紅い花」を夫婦で一緒に見ることを楽しみにして植物園に来たのに、自分一人が花を見終わるやいなや「そろそろ帰ろうか」と提案してくる夫の身勝手さに驚くとともに、あきれ果てている。

② 「気分はすっかりよくなった」のでこれから夫と一緒に植物園を散歩しようと思っていた矢先に、期待とは反対に「そろそろ帰ろうか」と提案されたので、どう答えていいものとまどっている。

③ 自分がベンチへ凭れたのはほんの短い時間だと認識していたが、夫の「そろそろ帰ろうか」という言葉で我に返ってみると、すっかり日が暮れていたことに気付き、時間の経過の早さに驚いている。

④ 妻に「早く外へ出たほうがよい」と言ったり、「そろそろ帰ろうか」と言ったりしてくる夫に対して、そんなに自分というのが嫌なのだろうか、非難するような気持ちになっている。

⑤ 体調が悪いのを我慢して「気分はすっかりよくなった」と嘘をついたが、夫がそれを見透かしたかのように「そろそろ帰ろうか」と提案してくれたことに驚いている。

13

傍線部カ「あんな女の児が欲しいわねえ」と妻がいつにない事をいう」とあるが、この場面について説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 体調が著しく悪化している妻が、夫に「気分はすっかりよくなった」と信じさせるために無理やり会話をしているので、不自然な発言になっている。

② 結核のために子供ができないことを自覚している妻が、自身はかない望みを、思わず口にしてしまっている。

③ 普段は子供を欲しがるようにそぶりのない妻だが、実は子供を望んでいることを、遠回しに夫に伝えようとしている。

④ 妻は元氣を取り戻し、これから生まれてくる子供のことを話題にするなど、先のことを明るく考えられるようになっていく。

⑤ 妻は植物園内で遊んでいた少女が気に入り、連れて帰りたいものだと、常識では考えられないような発言をしている。

14

空欄

B

には、妻から子供(娘)に「遺伝」したものが入る。本文中の記述を踏まえたうえで、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 団栗のすきな事も、折鶴の上手な事も

② 団栗のすきな事も、絵の上手な事も

③ 歌うののすきな事も、琴の上手な事も

④ 団栗のすきな事も、料理の上手な事も

⑤ 歌うののすきな事も、縫い物の上手な事も

三

次のA～Cのそれぞれの設問に答えなさい。

A

15～19の各文の傍線部のカタカナを漢字に改めたとき、それと同じ漢字を傍線部のカタカナに含むものを、それぞれ後の①～⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

15

弟はこの集団の中で異サイを放っている。

- ① 今年は大きなワザワいが起きるというデマが広がっている。
- ② これらの中ではこの作品の出来がキワだっている。
- ③ 私は、そのテストで、大間チガいをおかした。
- ④ 彼女はいつもイロドリ鮮やかな服を着ている。
- ⑤ 隣人はあの会社の中でとてもエライ人です。

16

なんでもできる友人はみんなのセン望の的となった。

- ① そんなに隙があると、人からネラわれるよ。
- ② 今日一日だけはアコガれるのをやめましょう。
- ③ 学生時代、男子学生はみんなあの先生のトリコになった。
- ④ 人もウラヤむような仲がいつも自慢の二人だった。
- ⑤ あの人はあまりにももてるので、人からネタまれている。

17

事柄のヒ相をみるだけではダメだ。

- ① あの政治家は化けのカワがはがれ、支持を失った。
- ② オモテに出ているところばかりに注目せず、裏を読むべきだ。
- ③ 帽子をカブツて散歩をした。
- ④ カレに逆らうと痛い目に合うよ。
- ⑤ ここのところ毎日、なぜだか空をトぶ夢を見る。

18

あの人の態度を見れば、その本心はオして知るべしだ。

- ① 事件の真相をスイリする。
- ② エイユウ的な行為をする。
- ③ その思考法はキノウ法である。
- ④ 暑いとケツアツが上昇する。
- ⑤ 書類に署名とオウインをする。

19

敵がヤ陰に乗じて、攻撃してきた。

- ① 陰暦の三月の異称をヤヨイという。
- ② 荒ヤを下って街に出た。
- ③ その武士は弓ヤで的を射抜いた。
- ④ 商店街のヤオ屋さんは繁盛している。
- ⑤ その歌手のヤ会に参加した。

B

②〃 ②〃 の意味を持つ語句として最も適切なものを、それぞれ後の①〃⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

②〃 無視して相手にしないこと。

① 相対する

② 客あしらいをする

③ 歯牙にもかけない

④ 意地を貫く

⑤ 引っ込みがつかない

②〃 言行や心が優れている人のこと。

① やさ男

② 佳人才子

③ 眼中の人

④ 奇特な人

⑤ 敬天愛人

②〃 自分のペースで穏やかに暮らすこと。

① 晴雲秋月(せいうんしゅうげつ)

② 精励恪勤(せいれいかつきん)

③ 朝令暮改(ちようれいぼかい)

④ 雨天順延(うてんじゅんえん)

⑤ 晴耕雨読(せいこううどく)

C

②〃 「A群」の①〃⑤の作家と文学思潮の組み合わせのうち、正しいものを一つ選び、その番号をマークしなさい。さらに②〃で選んだ作家の発表した作品を、②〃「B群」の①〃⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

②〃 「A群」

① 泉鏡花——アララギ派

② 菊池寛——ホトトギス派

③ 高村光太郎——新感覚派

④ 太宰治——無頼派

⑤ 三島由紀夫——新思潮派

②〃 「B群」

① 「金閣寺」

② 「人間失格」

③ 「藤十郎の恋」

④ 「高野聖」

⑤ 「道程」

(以上で問題は終わりです。解答票の解答番号②〃以降は使用しません。)